

児童の登校回避感情に関する認知モデルと修正訓練の検討

22424062 嶋本 恵

主査教員 東條光彦

副査教員 安藤美華代 上地雄一郎

1. 問題と目的

抑うつ認知モデルでは、素因ストレスモデルがよく知られる (Beck *et al.*,1979)。一方、不登校の問題では、登校回避感情が生起される背景にセルフエスティームの低さなどがあり、抑うつ症状と類似した心理的特徴もある。嶋本(2012)は、登校回避感情を抑うつ表現型のひとつと捉え、児童の抑うつ認知モデルと照合することでその生成過程を検討した。その結果、佐藤(2008)とほぼ同様の認知モデルが得られたが、児童の抑うつ生成過程における素因ストレスモデルとより明確に比較論じるためには、児童の抑うつに影響を及ぼす友人関係・学業ストレスや家庭ストレスをも考慮する必要がある。以上のことから、本研究ではより有効な児童の登校回避感情に関する認知モデルを構築することを第一の目的とする。

ところで、スキーマは児童期から思春期にかけて発達の的に形成され、中学生ではスキーマが変化しにくい認知的構造と言われている (佐藤,2008; 柞野他,2010)。そこで本研究では、自動思考の変容を促すことでネガティブな自動思考の反すうを抑制するプログラムを実施し、構築された登校回避感情に関する認知モデルに基づく臨床実践の有効性を示すことを第二の目的とする。

2. 研究 I : 児童の登校回避感情に関する認知モデルの構築

【方法】(1)調査対象：西日本の公立小学校に通う

4～6年生 1,525 人。

(2)調査内容：①抑うつスキーマの測定：佐藤(2005)の児童用非機能的態度尺度(Dysfunctional Attitudes Inventory for Children: DAIC)のうち、「破局的・絶望的態度」9項目。

②自動思考の測定：佐藤・嶋田(2006)の児童用自動思考尺度(Automatic Thoughts Inventory for Children: ATIC)16項目。

③登校回避感情の測定：古市(1997)の学校忌避的感情測定尺度 10 項目。

④学校ストレス(友人関係・学業)の測定：嶋田(1998)の小学生用学校ストレス尺度のうち、「友だちとの関係」尺度 6 項目、「学業」尺度 8 項目。

⑤家庭ストレスの測定：家庭の雰囲気尺度(菅原, 八木下, 詫摩, 八泉, 瀬地山, 菅原, 北村, 2002)。

【結果と考察】(1)分析対象：記入漏れや記入ミスがあった回答を除いた 1,175 名(有効回答率 77.0%)。

(2)登校回避感情に関する認知モデルの検討：児童の登校回避感情に関する認知的過程について仮定したモデルを作成し、構造方程式モデリングによる検討を行った。その結果、家庭ストレスである「家庭の雰囲気」および自動思考の下位尺度である「将来への期待」を組み込まないモデルが採用された(Fig.1)。「抑うつスキーマ」から「学校

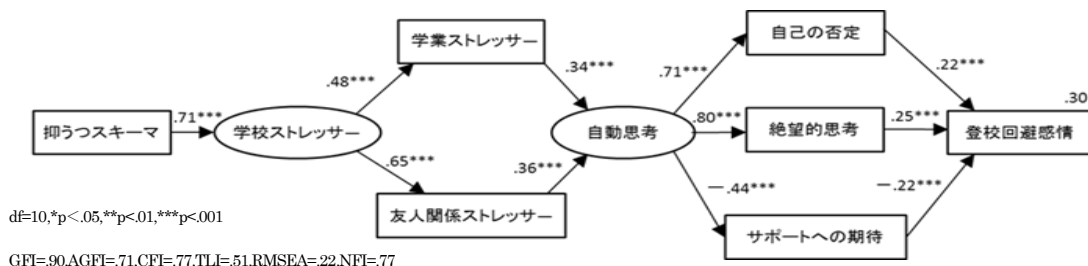


Fig.1 児童の登校回避感情に関する認知モデル

ストレッサー」の下位尺度である「学業ストレッサー」, 「友人関係ストレッサー」に対し, 有意な正のパス, 「自動思考」の下位尺度である「自己の否定」, 「絶望的思考」に対し有意な正のパス, 「サポートへの期待」に対し有意な負のパスが認められた。そして「登校回避感情」に対し, 「自己の否定」, 「絶望的思考」, からは有意な正のパス, 「サポートへの期待」からは有意な負のパスが得られた。

「登校回避感情」が生起する過程には, 「抑うつスキーマ」をもつ者がストレスフルな出来事を経験することにより, 単なる「落ち込み」が“自分はだめな人間だ”などのネガティブで継続的な自動思考の反すうを誘発していく。このように「自己の否定」のようなネガティブな自動思考と「サポートへの期待」のようなポジティブな自動思考のバランスの崩れが大きく影響していることが示唆された。一方, 「家庭の雰囲気」が登校回避感情に対しそれほど影響を与えなかったことについては, 登校回避感情は学校における抑うつ感情であるため, 児童が体験しやすいストレッサーとして主に学校ストレッサーが影響を与えたと考えられる。また, 「将来への期待」も同様に登校回避感情にほとんど影響を与えなかった。先に述べたとおり, 登校回避感情が生じる過程において自動思考のバランスの崩れがあるとすると, そもそも「将来への期待」は影響しない変数である可能性が推察された。

3. 研究Ⅱ：自動思考統制プログラムの実践

【方法】(1)調査対象：西日本の適応指導教室（2教室）に在籍する生徒13名。

(2)調査方法 a)以下の4点を測定することのできる質問紙調査票を作成し, 用いた。

①抑うつスキーマ ②自動思考 ③登校回避感情
④友人関係：吉岡（2001）の友人関係測定尺度のうち, 「自己開示・信頼」尺度9項目

b)参加者の理解度

c)指導員による評価：質問紙調査票（友人関係）および自由記述により回答を求めた。

(3)プログラムの構成要素：心理教育を主な構成要素とし, 各回のセッションの内容は, 第1セッション

『気持ちはどのようにして生まれるの?』とし, 事象と情動反応の間に認知的評価が介在していることを習得することを目標とした。第2セッションは, 『バランスのよい考え方をしよう』とし, 同様の事象に対し, 情動反応が異なるのは認知的評価が異なるためであることに気づくことを目標とした。第3セッションは, 『自分に合ったリラクゼーション法を見つけよう』とし, 自分に適したリラクゼーション法を見つけることを目標とした。また, 呼吸法の訓練も行った。

【結果と考察】

i)プログラム内容の理解度

(1)対象：1回以上プログラムに参加した生徒

(2)実施者および参加者によるプログラムの評価：いずれの教室においても, 参加者はワークなどに集中して取り組んでおり, 実施者は考案したセッションの流れに沿った介入を行うことが可能であった。また, 授業目標の理解度について4件法で尋ねた結果, 第1セッションでは3.40点, 第2セッションでは3.36点, 第3セッションでは3.57点と比較的高い得点が得られ, 大半の参加者が内容について理解できていたと考えられる。

ii)自動思考統制プログラムが抑うつスキーマ, 自動思考, 友人関係に及ぼす効果

(1)対象：3回全てのプログラムに参加した5名。

(2)各評価得点の変化：「抑うつスキーマ」尺度得点およびネガティブな自動思考である「自己の否定」, 「絶望的思考」尺度得点について, 半数以上の参加者は下降したが, それ以外の参加者においては上昇する傾向を示した。また, ポジティブな自動思考である「将来への期待」, 「サポートへの期待」尺度得点では, 大半の参加者において上昇する結果となった。さらに, 友人関係尺度の下位尺度である「自己開示・信頼」尺度得点においては, 半数以上参加者において上昇する傾向が見られた。このことから, プログラムが参加者の抑うつスキーマ, 自動思考, 友人関係に一定程度の影響を与えたことが考えられる。

【主要引用文献】

佐藤寛（2008）. 児童における抑うつの認知モデルの検討 行動療法研究, 34(3), 255 - 272.